

令和6年度の教育課程特例校の取組内容と自己評価及び学校関係者評価

<p>1 特別な教育課程の概要</p>	<p>特別な教科「道徳」、総合的な学習の時間及び特別活動を統合した新領域「光輝（かがやき）」（以下「光輝」）を中心とした幼小中一貫教育カリキュラムの開発に取り組む。</p> <p>高度で競争的でグローバル化社会に適応するために求められる3つの次元（躍動する感性、レジリエンス、横断的な知識）の基礎となる資質・能力（人間味溢れる豊かな感覚、自ら学ぼうとする姿勢、粘り強く取り組む力、コラボレーションする力、複眼的に思考する力、知識と知識を関連付けながら追究する力、論理的に問題を解決する力）を育成することを目標とし、「光輝」の時間を中心に、異校種交流、異学年交流や教科指導に用いる評価基準表を作成し、全ての教育活動の中に組み込んだ。</p>
<p>2 自己評価 (1) 成果</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・幼小中一貫教育推進の各部会が連携をして、異校種間交流による子供の変容を想定した「光輝」のカリキュラムや評価基準表を作成し、評価活動を各校種、各学年で実施することができた。 ・アンケート結果より、子供達が人とかかわる上で「他者を受容すること」が重要であると捉えられるようになってきた。 ・各時期の子供達に対する教師の関わり方や見取り方等を共有することができた。
<p>(2) 課題</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・各教科及び光輝（道徳、特活等を含む）で行った評価活動の結果を用いて、幼小中一貫教育推進のカリキュラム評価部会が中心となって子供の変容から見えてきた指導方法の改善や評価基準表の修正等を行い、課題解決に取り組んでいく。 ・他者との関わりに対する意識が受容のみに留まっているため、今後は、互いの考えに基づいて意見し合えることを促すため、より自己発揮できる場を効果的に設定していく。
<p>(3) 評価※¹</p>	<p>B</p>
<p>3 学校関係者評価 (1) 意見</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・カリキュラム評価部会を中心として各部会連携のもと行われたアンケート調査は、子供達に「何が自分たちに求められているのか」を具体的に考えさせるよい問いかけである。 ・子どもの姿の変容を評価基準表に基づき評価しながらカリキュラムの改善に取り組まれ、成果につながっていることが分かる。 ・他者との関わりに対する意識が受容のみで留まっているようなので、自己を見つめ、自己肯定感、自己有用感の高まりから自己理解をさらに進め、自己発揮のできる場を設定してほしい。
<p>(2) 評価※²</p>	<p>B</p>

※¹ 自己評価 A 高いレベルで達成できた B 達成できた C 一部達成できなかった
D ほとんど達成できなかった

※²学校関係者評価 A とても適切である B 概ね適切である C あまり適切でない D 適切でない
E 判定できない